

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

逆接を表す接続表現の中日対照研究
－「但是 (danshi)」と「けど」を中心に－

氏 名

胡 蘇紅

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国語の逆接を表す接続表現である「但是 (danshi)」と日本語の逆接を表す接続表現である「けど」の使用実態と機能を考察したうえで、「けど」の品詞を「接続助詞」、「接続詞」、「終助詞」、「談話標識」に分けて、「但是 (danshi)」との対応関係を記述した。

「但是 (danshi)」は中国語の日常会話で頻繁に用いられる転折連詞である。中国語と日本語の対訳辞典では、「但是 (danshi)」と日本語の「けど」は同一のものとして扱われている。これまで、多くの研究が「但是 (danshi)」と「けど」のそれぞれの用法について、語用論、会話分析、通時的分析、文体論、認知言語学などの観点から考察してきたが、「但是 (danshi)」と「けど」の使用状況を考察した研究は管見の限り陳(1993)と王麗莉(2017)以外はない。このような状況から、「但是 (danshi)」と「けど」の相違点について、書き言葉と実際の日常会話のデータを用いてさらに考察する余地があると考えられる。

そこで本論文では、大量の書き言葉のデータと実際の日常会話のデータに基づき、「但是 (danshi)」と「けど」の使用実態を記述することを通して、「但是 (danshi)」と「けど」の相違点を明らかにすることを目指した。

本論文は7章より構成される。

第1章では、中国語の「但是 (danshi)」と日本語の「けど」の用法およびこれまでの逆接を表す接続表現の中日対照研究を概観し、「但是 (danshi)」と「けど」の対照を自然会話のデータに基づき行う必要があることを示した。そのうえで、6つの研究課題および本論文の構成を提示した。

第2章では、これまでの「但是 (danshi)」と「けど」に関する先行研究を概観したうえで、先行研究の問題点を指摘し、本論文の目的を提示した。

第3章から第5章までは、コーパスを用いて、中国語の「但是 (danshi)」および「虽然 (suiran)」の使用実態に関する考察と日本語の「けど」の使用実態に関する考察を

展開した。

まず、第3章では、分析資料である『CCLコーパス』と『大連財経学院コーパス』について説明したうえで、書き言葉と中国人大学生による自然会話における「但是 (danshi)」と「但 (dan)」の相違点を、出現数、出現位置、共起表現、機能という4つの側面から考察した。その後、「但是 (danshi)」と「但 (dan)」の比較を通して、「但是 (danshi)」の特徴を明示した。具体的には、まず、「但是 (danshi)」は書き言葉に比べ、自然会話において頻繁に用いられることを示した。次に、「但是 (danshi)」は書き言葉において、文と文をつなぐ場合に頻繁に用いられること、自然会話において、ターン中で頻繁に用いられることを示した。また、書き言葉と自然会話のどちらにおいても、「但是 (danshi)」と「虽然 (suiran)」の共起率が最も高いが、書き言葉では、「但是 (danshi)」と従属節に生起する連詞（接続助詞・接続詞）との共起率が「但 (dan)」に比べ低いことを示した。さらに、書き言葉において、「但是 (danshi)」の後ろで一時中止する文の割合が高いのに対して、自然会話においては、「但是 (danshi)」の後ろで一時中止する会話の割合が低いことを示した。最後に、自然会話において、連詞（接続助詞・接続詞）として用いられる場合には、「但是 (danshi)」に比べ「但 (dan)」の使用頻度が高いのに対して、談話標識として用いられる場合には、「但 (dan)」に比べ「但是 (danshi)」の使用頻度が高いことを示した。

続いて第4章では、頻繁に「但是 (danshi)」とペアで用いられる「虽然 (suiran)」の使用に関して、先行研究を概観したうえで、『人民日報』（2000年全年分）と『大連財経学院コーパス』のデータに基づいて考察を行った。まず、「虽然 (suiran)」と「虽说 (suishuo)」などの類似表現との比較を通して、新聞においても、自然会話においても、「虽然 (suiran)」が最も多く用いられることを示した。興味深い点は、先行研究で話し言葉でのみ用いられると言及されている「虽说 (suishuo)」と「虽说是 (suishuoshi)」が書き言葉でも用いられていることである。さらに、『人民日報』では、「虽然 (suiran)」は「但 (dan)」と最も頻繁に共起して用いられるのに対して、『大連財経学院コーパス』では、「但是 (danshi)」と最も頻繁に共起して用いられることを示した。最後に、『人民日報』では、「虽然 (suiran)」と副詞が頻繁に共起して用いられるのに対して、『大連財経学院コーパス』では、「虽然 (suiran)」と「連詞+副詞」が頻繁に共起して用いられることを示した。

第5章では、先行研究の結論を踏まえながら、日本語の「けど」に関する考察を行った。まず、文末における「けど」と「が」の相違点を認知（参照点構造）・機能的観点から考察した。「が」と「けど」の出現位置は、ターン中が多いものの、両者ともターン末に全体の4分の1前後の数が生起していることから、日常会話において「が」と「けど」の終助詞用法が定着していることが確認できた。文末における「が」は広義の「対立」機能に含まれる「前置き」機能を文中と同様に表す傾向が強いのに対し

て、「けど」は話し手の主観的態度を表す傾向が強いことが明らかになった。次に、依頼と断りの相互行為における「けど」の言いさし表現（終助詞用法）を連鎖組織の観点から考察した。その結果、「けど」の言いさし表現は前方拡張および後方拡張に比べ、本題行為と挿入拡張で頻繁に用いられることが分かった。さらに、「けど」は「前置き連鎖」、「挿入連鎖」、「後方連鎖」の発話行為連鎖ごとに機能が分化していることが明らかになった。最後に接続詞である「けど」と「だけど」の相違点に関して、機能拡張の観点から考察した。まず、話し言葉において、接続詞として用いられる場合に、「けど」に比べ「だけど」が頻繁に用いられることが明らかになった。また、「けど」と「だけど」のどちらも接続詞から談話標識への機能拡張傾向を持つが、「けど」に比べ「だけど」において談話標識へ機能拡張の進度が速いことを示した。

第6章では、品詞別の角度から、中国語の「但是 (danshi)」と日本語の「けど」の対応関係を考察した。これまでの先行研究は主に接続助詞である「けど」と連詞である「但是 (danshi)」の対応関係を考察している。しかし、接続詞、談話標識および終助詞として用いられる「けど」と「但是 (danshi)」の対応関係を深く考察する必要があると考えた。本研究の考察を通して、「倒置文における「けど」に対応するのは「但是 (danshi)」ではなく、「虽然 (suiran)」である」という新しい提案を行った。さらに、「「但是 (danshi)」は「けど」に比べ、自然会話で談話標識としての使用頻度が高い」という先行研究で言及されていない特徴を示した。

最後に第7章では、本論文の総括を行い、中国語学、日本語学、対照言語学、日本語教育への示唆を述べた。

以上、本論文では、コーパスを用いて、中国語の「但是 (danshi)」と日本語の「けど」それぞれの使用実態と機能を明らかにしたうえで、「接続助詞」、「接続詞」、「終助詞」および「談話標識」として用いられる「けど」と「但是 (danshi)」の対応関係を考察した。